
雪降る夜に

レミングス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪降る夜に

【Nコード】

N5845F

【作者名】

レミングス

【あらすじ】

ある一人の女性の前に、天使が一人舞い降りました。死にいく者しか知らない天使が知った物とは？

夜、静けさと寂しさが同居した空間に、一人の男がぼつ、ぼつと歩いている。目立たない黒のロングコートに、頭を覆い隠すように被られている帽子。端目から見ると、まさに彼は夜の様だった。

一軒の家の前に立つと、彼は白い息を吐き、続いてドアに手をかけてゆっくりと開いた。

「ただいま」

「お帰りなさい。今日はどうだった？」

玄関の向こう側から聞こえてくる声は明るさで一杯だった。彼は部屋への扉を開いて、初めて帽子をとった。一見普通の人間のようにだが、良く見ると小さな羽が背中から生えていた。

「ああ、今日も人々はいつも通りだったよ」

「良かった。だったらきつと神様も祝福して下さいますね」

椅子に座り、出てきたミルクティーをゆっくりと啜った。ほのかな甘みが体中にしみわたり、彼はようやく一息つく事ができた。

「ここに来て、もうどれ位？」

「三年になるかな。思えば、長い事ここにいるな。私は」

「私はとっても嬉しい。人に言っても信じてもらえないけど」

目の前で微笑む彼女の名は宮川ひかりという。彼女の手にもカッブが握られており、中身はいつもハーブティーだった。

「君は不思議だね。こんな事初めてだ」

彼は何度とも知れない台詞を彼女に言った。言われた彼女はそう？ というかのように髪を指で弾いた。

「天子様が来て下さるなんて、喜んで当たり前じゃない？」

「天使とはいってもね・・・」

彼は苦笑を禁じえない。いくら天使とはいえ、自分は司るのは死なのだから。

「後一年かあ、何しようかなあ」

彼女は初めて彼に会ったとき言われた言葉を思い出して呟いた。彼女の寿命は残り一年。それが天界が決めた、彼女の残された時間だった。彼は言われた通りそれらを対象者に伝達し、その後の動向を見守る。たったそれだけ。

「本当に神様に会えるなんて」

「別に絶世の美男子というわけでもないよ。あくまで外見は普通のお方だ」

若い女性らしく目を輝かせる彼女に彼は現実を突き付ける。少なくとも、外見だけならば神より優れている者はいくらでもいた。

「それでも会いたいの。貴方は黙ってて」

「はいはい、会ったときに後悔する事だな」

ここに来てから、彼らのこうした掛け合いはいつもの事だった。

「初めて貴方がここに来たときも、雪が降ってたなあ」

「そうだったかな？」

「もう、覚えてないの？」

「天使も物忘れが激しくてね」

「何それ」

初めて会った日、残された寿命を告げられた彼女はあっさりとその運命を受け入れた。それどころか、彼をそのまま部屋の中に入れて、こう言ったのだ。

『じゃあ、私の側において最後まで見ててくれない』

彼は、別段住む場所を決めているわけでは無かった。だからここに住む事にも支障は無かったのだが、誰かと住む、と言う事が未経験だった彼にとっては、それはとても珍しい経験になっていた。現に今も、一人の時は決して口にする事は無かった物を口にはしている。ここに居ついた彼がまず始めたのはこの街の人間達を見て回る事だった。今まで彼が見てきたのは死に行く人間ばかりで、しかもそんなに時間が残されているわけでは無い者ばかりだった。原則として、一人の人間に対して一人の天使がつくことになっている。

ところが今回こんなに時間が与えられたため、彼は初めて生きて

いる人間という物を見た。最初はその活気にも、いつか死んで行くのに。という寂しさしか感じる事は無かったが、いつのまにかそれが人間なのだ、という肯定的な価値観を持つに至っていた。

これも彼女の側にいたからだろうか、と彼は思う。あの時彼女の側にいる事を拒み、そのまま別れて現世を意味も無くふらついていたとしたら、自分はどんな価値観を持つに至っていただろうか。

「それもまた意味の無い問いだな」

「何が？」

「いや、独り言だ」

「そればかり、偶には教えてください」

「気がむけば」

「生きているうちをお願いします」

起こった様なポーズを取る彼女のそれが、演技だと言う事を彼は良く分かっていた為。彼はそれを無視して気になっていた話題へと話を変えた。

「書けたかい？」

「ああ、あれ？ もう少し。絶対完結させるから待ってて」

彼女は一つの物語を書いていた。どんな話かは教えてくれてはいないが、心温まるお話にしたい、と彼女は言っていた。そう言うのなら、きつとそうなのだろう、と彼は思う。そのお話に心動かされる者もどこかにいるのかもしれない。その中に一人になれば光栄かな、と彼は密かに願った。

ふと窓を見ると、中のよさそうな五人の家族が外を歩いている。どうやら一番下の子供が駄々をこねているらしい。姉と思しき人物はもう、と頭に手を当て、母親と父親はにこやかにそれを見守り、兄が妹を抱き上げて、何かしら言った。すると駄々をこねていた子ども笑顔になり、彼らはまた歩き出した。彼の好きな物の一つ、家族の典型的な絵だった。

にこやかにそれを見守る彼を見た彼女はごほん、と一つ咳をしてから仰々しく姿勢を整えた。

「だが、タイトルだけは教えてあげない事も無い」

「ほう、何と言うのかな」

視線を彼女の方に戻した彼に、彼女は花のように微笑みながら彼の耳元でゆっくりと、囁いた。

「恋の魔法」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5845f/>

雪降る夜に

2010年10月8日15時36分発行